

第6回 共創学研究会

「研究交流会—みえてきた共創のかたち—」

話題提供と討議
ポスター発表要旨



2019年3月9日（土） 12:30-18:00

東洋英和女学院大学 六本木校地

主催：共創学会

話題提供と討議

テーマ：実践の中の共創「共創なんていわない」

【趣旨】

本企画の会議時、企画者4人それぞれの実践現場には、共通部分のみならず相違が多くあることがわかった。「共創」という言葉に依存すると、多様な現場での実践を、均一化・ブラックボックス化しかねない。本企画では、共創という言葉をあえて使わず、各現場に根ざした「『共創』的な概念」を議論することで、ボトムアップに共創のかたちが浮かび上がることを目指したい。

【話題提供】

① 保育者と観察者の子どもをみる“異なる”まなざしはどのように“共に”のまなざしへ変わったか

(山下愛実 お茶の水女子大学大学院)

② 時空間を隔てた文脈の「ずれ」が駆動する音楽実践の諸相

(石橋鼓太郎 東京藝術大学大学院)

③ 「音楽を媒介にしていた療法的活動」から「その場に居るひとたちで音楽する場を創る」形への変化～セラピストの中で何が変わったのか～

(尾形由貴 東洋英和女学院大学大学院)

④ 実践知研究のリアルタイム性～切に、野生的に、たたきあげる～

(堀内隆仁 慶應義塾大学 SFC 研究所)

【討議】

4名の話題提供者とコメンテータが、実践の中の共創について、フロアーとともに討議を行います。

コメンテータ：中村美亜（九州大学）・岡本誠（公立はこだて未来大学）・
三輪洋靖（産業技術総合研究所）

モデレータ：西 洋子（東洋英和女学院大学）

ポスター発表（前半）

ID1：珊瑚の石垣を築造する技術の学びの体験と省察による共創

竹ヶ原光佑 早川怜 宮田諒 藤井晴 篠崎健一 平田貞代

(東京工業大学, 日本大学, 芝浦工業大学)

石垣の築造技術を伝承する方法の共創を、石垣築造の現場での熟練者との共同作業とその多角的な省察を構成的に繰り返すことによって、試みている。省察は、1) 石垣築造マニュアルの作成、2) 言語表現が困難な技術知の写真とことばによる表現、3) 石垣築造において意識すべきことの顕在化、4) 石垣築造のパターンランゲージの作成などを通して行なっている。この試みの大きな流れの上に上記 1～3 を関連づけて報告する。

ID2：函館西部地区バル街における共創型デザインの分析

丹羽可那子 (公立はこだて未来大学)

本研究は、共創型デザインの知が当事者主体で行われる市民活動の中にあると考え、函館西部地区バル街を対象とし、バル街の活動を共創型デザインの視点から調査・分析した。バル街の当事者にインタビューや参与観察を行い、調査結果を事拾図（出来事を共有する方法）にまとめることで、バル街における共創型デザインの知を明らかにした。

ID3：レッジョ・エミリアにおける幼児教育アプローチはコミュニティをどのように変容させているのか

浅見亜美 (東洋英和女学院大学大学院)

北イタリアの小都市〈レッジョ・エミリア〉では、地域コミュニティから生まれた幼児教育アプローチが国際的に評価され、各国の教育関係者がこの街を訪れ、注目されることで、コミュニティが変容し続けている。本発表では、主に2回の現地調査を通じて捉えた、コミュニティと幼児教育との循環によるコミュニティの変容の具体的な姿を報告する。

ID4：私の包摂一足元の出来事からー

富樫悠紀子 (九州大学芸術工学府)

社会包摂に有効な表現活動の質を考えていくために、社会や世の中にとっての包摂とは何か？という大きな話をしようとしたら、自分の言葉に違和感が生まれた。自分の実感からずれているし、この問いの答は一人一人が自身の経験から見つけていくことなのではないか、と思ったからだ。そこで、今回は私

の足元にある日常の中から私にとっての包摂の出来事を文章と写真で捉えることにした。

ID5：小さな組織のデザインプロセスから学ぶ好循環共創事例の考察

岡田恵利子（公立はこだて未来大学大学院）

製造業でデザイン開発に10年以上携わってきた筆者は、開発現場からユーザが遠くなる状況を数多く経験した。この課題の解の一つとして共創が重要と考える。共創型の新しいデザインを考える為、一つは自身の経験や私と同様な経験を持つ複数当事者の経験を可視化し問題構造を明示する。もう一つは、ユーザと密に好循環なデザインプロセスを実践する小さな組織に着目、共創事例を収集した。本発表ではこれらの研究経過を紹介する。

ID6：子どもは他者とどのように繋がろうとするのか—2歳児の「生活場面」でのやりとりに着目して—

田中芳美（東洋英和女学院大学大学院）

子どもは他者とどのようにして繋がろうとするのだろうか。本研究では、言語的・非言語的コミュニケーションが混在する2歳児に焦点を当て、子どもと保育者との個別のやりとりを関係性の中で捉えようと試みた。具体的には、2018年4月～10月に保育者としてかかわり収集した200のエピソードを質的に検討した。結果として、2歳児のコミュニケーションは、心理的距離が近い特定の人との関係性が基底となり生じることと、興味深いことに他者と繋がりたいという思いをもっているものの、その表現方法はまだ混沌としているため、継続して繋がる場合のみではない不確定な状況にあることが明らかになった。

ID7：オーケストラの合奏練習における意識と身体動作についての分析

曾我部夏樹（公立はこだて未来大学）

本研究では、共創的演奏における演奏同期の習得過程について、学生オーケストラの合奏練習に参加し、日記法とビデオカメラを用いた撮影により内省と外観を記録した。内省からはタイミングとリズムについて特に意識しているという結果が得られた。また、外観からは、練習を重ねるにつれて他の演奏者の音色に対する意識や指揮者への目視が増え、上半身の身体動作により周りとの演奏を調和させていることがわかった。

ポスター発表（後半）

ID9：都市緑地における自分ごと

川口響子（公立ほこだて未来大学大学院）

街には多くの都市緑地が存在する。都市緑地とは、街路樹や植栽柵、個人の庭など都市の景観を形成している緑地のことである。それらの多くはその街に住む市民によって手がけられたものであり、都市緑地を介したコミュニティが形成されていたりする。本研究では、街において都市緑地を介したまちづくり活動の実態調査を行った。そこで、実際に筆者が緑化活動に参加するうちに都市緑地を自分ごととして捉えていった。

ID10：遊びの持続を試みる 1-2 歳児のかかわりの工夫

岡南愛梨（お茶の水女子大学大学院）

近年、日本では1-2歳児保育の需要が高まり、その保育の質の検討が課題となっている。しかし、保育所等における1-2歳児の子ども同士のかかわりについては、いまだ研究が少ない。今回は、こども園で見られた1-2歳児のかかわり合いについて、特に遊びを持続させる方略に着目して、その様相を明らかにすることを目的とした。方法としてはエスノグラフィーを採用し、こども園の1歳児クラスでの参与観察で収集した事例を分析する。

ID11：主観的「おいしさ」の共有による食事コミュニケーションシステムの提案

榎原輝（筑波大学理工学群工学システム学類）

食事は生命維持活動にとって必要不可欠であり、コミュニケーションを行う場としても重要である。そこで、人が感じた主観的「おいしさ」を他者に提示し、かつ他者と共有する装着型デバイスを提案する。本手法により、食事において他者が感じた主観的「おいしさ」を直感的に把握できるようになり、コミュニケーションのきっかけの創出やおいしさの明示的な共有等の新しい食事コミュニケーションを実現する。

ID12：自発言語のない自閉症児との共創—二人で歌を歌えた時間—

角田洋子（東洋英和女学院大学大学院）

障害児放課後デイサービス通所施設において、2年間の音楽療法（月2回）の最終日に、自発言語のない中学2年自閉症スペクトラムの男児が、初めてセラピスト（筆者）と一緒に1曲を全て歌うことができた。この時の参加者全員の喜びと、その出来事を聞いた保護者（母親）の喜びの要因は何であったの

か。2年間のセッション記録を振り返り、音楽療法における「言語」と「歌唱」の変化を対象児の「歌唱録音」も含めて推察する。

ID13：他者との「共創」する空間生成

宮本聡（九州大学人間環境学研究院）

本発表においては、発表者が継続的に参与する障害のある人の演劇制作のフィールドを対象とし、そのような他者との共創的な空間はいかにして生成しうるのかを検討する。他者と作品を共創的に作り上げていくということの難しさと、そのような困難がある中で現場の中から超克しえるのかを考察する。

ID14：ボトムアップ型地域デザインの実践研究 —実践を共有する表現—

須藤か志こ（公立はこだて未来大学）

近年トップダウン型ではなく、地域に密着しながらボトムアップ型の地域デザインに取り組む実践者が増えている。彼らの活動は目的やモデルなど多種多様であり、全国各地で類似した活動が行われている。しかしそういった活動は先行研究も乏しく、理論的に分析、説明することや、実践者によるノウハウを共有することは難しい。そこで本研究では、ボトムアップ型地域デザインを筆者が実践者として行い、活動をどのように記述し振り返れば共有しやすくなるのかを探求することを目的とする。

ID15：届いていない遺族が望む対応—司法解剖の実施から—

山田恵（東洋英和女学院大学大学院）

司法解剖は、犯罪被害者遺族が直面する刑事司法手続きである。遺族は大切な人を突然失った動揺の中で、否応なしに進められていく一連の流れに困惑している。本研究では、遺族の声を端緒として被害直後からの対応の必要性に着目し、諸外国における対応を遺族の心情に即して時系列で示した。その結果、日本における現行の制度では「捜査機関側」（専門家）に届いていない「遺族側」（素人）の想いと求めのあることが明らかとなった。